

抜き取って
お読みください

Atsugi City Board of Education
厚木市
教育委員会だより

ナビ



エデュ

Edu Navi

Education is an investigation
for the future

ATSUGI CITY
第2号
JANUARY.1.2018



【おもしろ理科教室】

(株)半導体エネルギー研究所からの寄付により創設した「SEL教育基金事業」の一環で実施。事業では、自然科学分野の優秀な自由研究などを表彰する「厚木子ども科学賞」も実施しています。



【協力企業・大学】

(株)半導体エネルギー研究所、ソニー(株)厚木テクノロジーセンター、アンリツ(株)、日立オートモティブシステムズ(株)、(株)富士通研究所、NTT先端技術総合研究所、合同会社デジタルポケット、神奈川工科大学、東京工芸大学、東京農業大学(順不同)

「すごい」なんて「なるの」。目を輝かせて実験に取り組む子どもたちから、驚きの声が上がります。市内の企業7社と理工系の大学3校から講師を招く「おもしろ理科教室」。子どもたちの理科や算数への興味を高めようと、毎年全市立小学校で実施しています。教室は、身近にある現象の謎を解き明かす、熱のこもった授業で大人気。人体や果物を電池にする実験、光を放つ化学反応、真空の体験、人力発電、プログラミングなどのほか、音楽の仕組みを算数で考えたり、飛行機はなぜ飛べるのかを学んだりバラエティに富んでいます。講師を務める株式会社半導体エネルギー研究所の大澤信晴さん(40)は「実験で新しい発見をしたり、目の前の現象の仕組みを理解したりできるのが理科の面白さ。授業を受けたみんなが理科好きになってくれたらうれしい」とほほ笑みます。

産学連携の授業は、最先端の科学技術を持つ企業・大学が立地する厚木市ならではの取り組み。わくわくする謎と魅力的な講師が、子どもたちの好奇心や未来への可能性を広げています。

問 教育指導課 ☎ 225-2675





地域で子どもを育てる

子どものしつけに困ったとき、身近に相談できる人はいますか。家庭での教育は、全ての教育の出発点です。しかし、働き方や家族構成の変化などにより、親だけで子どもを教育していくのは難しい現状があります。地域とのつながりの希薄化も叫ばれる中、市内では、未来を担う子どもたちを地域全体で育む取り組みが広がっています。■社会教育課 ☎225-2513

地域ぐるみ 家庭教育支援事業

生活習慣や思いやりの心、社会的なマナーなどの教育を、地域全体で支援する事業です。地域のイベントなどに「子育て支援」の視点を取り入れて改善し、子育て世帯が地域とつながるきっかけづくりをしています。

地域ぐるみ家庭教育支援事業ロゴマーク
対象イベントは、「公民館だより」のこのロゴマークが目印です。皆さんの参加をお待ちしています。

土曜日、森の里小学校の体育館に、子どもたちの楽しそうな声が響きます。火起こしや災害時用の簡易食器作り、寝床の仕切りパネルの組み立てなどを体験する子どもたちに、地域のボランティアが寄り添います。災害時の避難所となる体育館に泊まり、翌日の防災訓練に参加する防災キャンプ。森の里地区で14年続く恒例行事です。「地域の催しに親子の姿が見える」といふ。地区の青少年健全育成会の幹事を務める青木信二さん(森の里・63)は、3年前から地域のイベントに「家庭教育支援」の視点を取り入れてきました。

今ある行事の見方を変える

青木さんは、森の里地区に住み始めた頃から、PTAや自治会で、地域のイベントなどに力を注いできました。「家庭教育支援」といふ言葉を知ったのは、学校外での教育の充実などに取り組みする社会教育委員を務めた平成21年。会議では、家庭教育の教育力向上が研究課題となっていました。家庭教育は、子どもが生きていく上で必要なマナーや生活習慣などを身に付ける大切な教育です。昔は地域のつながりが強く、若い親を近所の住民がサポートするなど、家庭教育を地域で支える仕組みが成り立っていました。地域の大人が子どもと関わる



防災キャンプでパネルを組み立てる参加者たち



相川こどもまつりでは、地域の方と小学生が図書を対局

子どもが来なくなる催しに

「モデル地区となった時、森の里のみならずも手探り状態だった」と、青木さんは当時を振り返ります。子ども会や育成会などから集まったメンバーからは「よその家庭に入っていくのか」「私たちは教育の専門家じゃない」と、不安の声が上がりましたが、青木さんの思いを理解するのに時間はかかりませんでした。「子どもたちのためなら、ぜひやろう」と、行事の実施方法の見直しが始まりました。防災キャンプは親子での参加を呼

機会も多く、コミュニケーション力も自然と育まれていました。しかし、都市化が進み、個人のプライバシーが尊重されていく中、家庭が孤立しがちになり、家庭教育の衰退は全国的な課題となっています。長年、地域で活動してきた青木さんは、専門として研修を受けてきた青木さんは、委員として研修を受けてきた青木さんは、専門的な個別支援や親の教育だけでなく、住民同士が顔見知りになることも、立派な家庭教育支援。地域にはたくさんイベントがある。新しい事を始めなくても、子どもや親を呼ぶ工夫を加えればよい。青木さんは、社会教育委員の仲間と共に、教育委員会に事業化を提案。26年からモデル地区(森の里、睦合南)での取り組みが始まりました。



子どもたちに語り掛ける青木さん(左)

び掛ける、夏の盆踊りをコンテスト形式にして親子賞を設けるなど、地域で続けている催しに少しずつ子どもを呼ぶ工夫を加えていきました。「少し見方を変えて工夫するだけで子どもの参加が増えた。これをきょうかして、少しずつ親と地域のつながりもできていく」と、青木さんは成果を実感しています。



緑ヶ丘地区の餅つき大会にはジュニアリーダーの中学生も参加

広がる家庭教育支援の輪

もう一つのモデル地区、睦合南で活動に携わったのは前頭七恵さん(妻田北・59)。青木さんと共に社会教育委員として事業化を提案した仲間です。睦合南では、自治会やPTA、子ども会など、地域団体の年間行事を一枚の紙にまとめることから始めました。今まで見えなかった、他団体の活動を知るためです。別々のイベントを一緒にすることで、子どもを取り合うことなく、より大きな催しにできる。PTAの「ふれあいまつり」に、公民館の地域子ども教室のブースを設

モデル地区の取り組みは、28年3月の「第1回地域ぐるみ家庭教育支援フォーラム」で発表され、全地区で効果や手法を共有。今年度から、市内全地区での取り組みが始まりました。依知北では親子で田植えから稲刈りまでを体験する催しが新たにスタート。厚木南では、子どもが作ったことをどんど焼きの日に掲げて交流の場をつくるなど、家庭教育の視点を取り入れる取り組みが各地で進んでいます。「家庭教育支援の成果は、すぐに表れるものではない。10年、20年と続けていくことがどんな工夫よりも大切」と、青木さんは力を込めます。「地域で子どもを育み、助け合うことが市内全地区で当たり前になってほしい。全地区でスタートしたことは、その目標への第一歩。今までの地域のイベントに参加したことがない人が『ちょっと行ってみよう』と思うきっかけになればね。地域のつながりを強めながら、家庭教育支援の輪が広がっています。」



南毛利地区で地域福祉推進委員会が運営する子育てサロン「みなみちゃん」には年間約2千人が参加

「つながり」こそ求められる支援



湘北短期大学 生活プロデュース学科 佐藤 知条 准教授

行政による家庭教育支援という、講座や相談などが多く実施されていますが、実際のニーズは「子育てサロン」のような、交流型の支援にあります。しかし、全国的に見ても、多くの自治体では地域の担い手不足により、地域交流型の支援が十分にできていないのが現状です。その点、厚木市は、昔から地域活動が盛んで、多くのイベントが各地で開催されています。さらに、親子・人が集まる公民館という活動拠点が整備されていることも大きな強みです。今まで長年取り組んできたことを生かした「地域ぐるみ家庭教育支援事業」は、厚木だからこそスムーズに展開できる支援策と言えます。この事業をきっかけに地域のつながりを強めることで、困難な問題を抱えた家庭への支援を、行き届きやすくしていくことが大切です。

イチオシ政策

PICK UP 1 あつぎキッズガイド(AKG) コミュニケーション
2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、厚木市を訪れる外国人と英語でコミュニケーションしたり、市のイベントなどで英語を使ってサポートしたりするキッズガイドを育てていきます。今年度は、キックオフ事業として、ゲームや簡単な調理などを通して、楽しみながら英語に触れる本格的にAKGプロジェクトを始動します。

外国人と笑顔で触れ合う子どもたち

第3回 地域ぐるみ 家庭教育支援フォーラム
日時 3月10日(土) 13時30分～17時
会場 厚木シティプラザ ホール250
内容 講演や活動発表など
3月1日までに社会教育課 ☎225-2513へ。

PICK UP 2 インクルーシブ教育
障がいの有無に関わらず、同じ場所で共に学び、共に育つインクルーシブ教育を推進しています。平成28年度から、毛利台小学校と玉川中学校をモデル校に指定。誰もが落ち着いて授業を受けられるように、黒板周りの掲示物を無くす取り組みや、個別支援を必要とする子どもが適切な支援を受け、みんなと同じ教室で、生き生きと生活できるような体制づくりを研究・実践しています。

モデル校では教員向けの研修を実施

PICK UP 3 あつぎスポーツアカデミー
トップアスリートを夢見る子どもたちを応援するため、平成26年度から市体育協会と連携して取り組み、年間約700人が参加しています。幼児体操教室をはじめ、小学生には「かけっこ教室」や運動能力を高めるトレーニングを実施。中学生では、野球やバドミントンなどの種目ごとに専門性の高い強化練習を取り入れ、発達段階に合わせたプログラムを展開しています。

ミニハードルでの使い方を学ぶ

みらいの種 教育長コラム 日曾田 高治
いじめは、子どもの心に深い傷を残すだけでなく、命をも脅かす絶対に許されない行為です。私たちがこれに立ち向かう決意を示す「いじめ防止基本方針」を10月に改定しました。
専門家で教職員などで構成する「いじめ防止対策委員会」の答申を受け、家庭と地域社会、学校、市、教育委員会、いじめに対する基本的な考えのほかに、未然防止や早期発見、適切な対処への取り組みなどをより詳しく記載しました。私と4人の教育委員が教育委員会の取り組みを審議する「定例会」においても議論を重ね、内容を充実させました。
近年では、児童会や生徒会を中心に、いじめの根絶に向けた宣言をしたり、話し合いをしたりと、子どもたち主体の取り組みが増えてきました。こうした活動や方針に定める取り組みをより実効性あるものにするのが私の使命です。教育委員会と教職員は、もちろん、子どもたちや保護者、地域の皆さんとを一つに行動していくことが鍵になるのだと思います。



定例会でいじめ防止基本方針を議論



学校、地域、警察のパイプ役に

スクールサポーター 梅津 加奈子さん(53)

平成24年から厚木警察署でスクールサポーターをしています。子どもの安全を守るために、警察と学校、地域をつなぐ窓口となることが一番の役目です。学校や行政、子ども育成団体の皆さんと会議などを通じて情報を共有しているほか、見守りやパトロール、学校への巡回訪問、啓発活動などしています。

元は警察官でしたが、結婚を機に退職し、子育てをしていました。交番相談員として復帰した後、県警察本部から打診があり、活動にやりがいを感じて引き受けました。先生や地域の皆さんと連携したパトロールで性犯罪者の逮捕につながった時は、たくさん感謝の言葉を頂き、とてもうれしかったことを覚えていますね。

私も3人の子を持つ親ですので、子どもが犯罪に関わってしまう不安は他人事ではありません。中でも近年目立つのがスマートフォンの交流アプリを通じたトラブルです。発端から被害までが見えにくく、親も知らないうちに素性が分からない人と連絡を取り、言葉巧みにだまされて自画撮りした裸の画像を送ってしまったり、性的被害に遭ってしまったりすることが増えています。悪いグループと関わりを持つのも容易にな

平成19年に多摩署でスクールサポーターとなって以来、各地で活躍

スクールサポーター

平成19年に学校、地域、警察の連携を目的に発足した制度。非常勤職員として厚木警察署生活安全第一課に2人が在籍し、厚木市と愛川町、清川村で活動しています。

【主な活動内容】

- 子どもの安全確保に関する学校などへの支援
- 地域安全情報の収集と提供
- 非行・犯罪被害防止教育の推進
- 少年の非行防止と立ち直り支援

厚木警察署 ☎223-0110



保護者などへの情報提供も大切な役割

学校や地域で活動していると、子どもたちに顔を覚えてもらい、気軽に声を掛け合えるようになります。そんな何気ない会話をしている時、この仕事に携わる喜びを感じます。これからも、皆さんと一緒に子どもたちの笑顔を守っていききたいと思っています。

こうした事態を防ぐために、子ども向けの非行・犯罪被害防止教室や、教職員・保護者向けの講話の依頼はできる限り引き受けています。子どもたちには、困ったとき、周りには相談できる大人がいることを伝え、大人には、子の顔をしっかりと見て会話し、ちょっとした変化を見逃さないことの大切さをお話ししています。



真剣に聞き入る児童に防犯のポイントなどを紹介

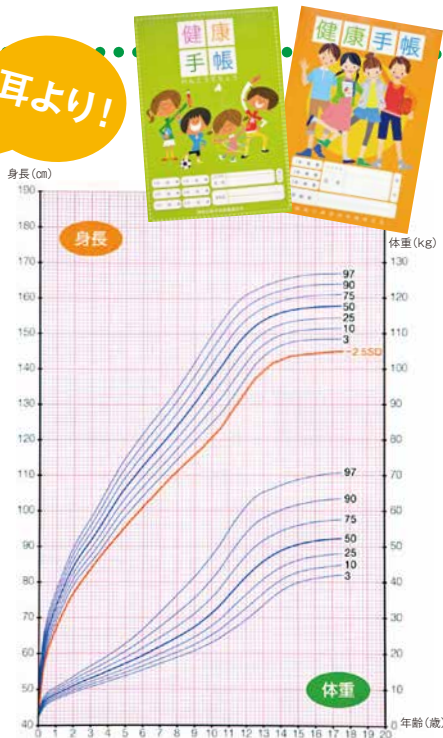
i n f o

親子のための 耳より!

使ってみよう成長曲線

成長曲線には、身長と体重の基準線があり、子どもの数値を記入すると、「肥満」や「やせ過ぎ」などが一目でわかります。病気が原因の低身長症や高身長症などの早期発見にもつながります。

子どもの成長過程を知ることは、食生活や生活習慣を改善し、健康な体づくりに役立ちます。グラフは、学校で配られる「健康手帳」に掲載されていて、誰でも気軽に始められます。皆さんもグラフに描いて活用してみたいかがでしょうか。



【成長曲線のグラフ(女性)】上は身長、下が体重のグラフ。青い基準線に沿っていれば正常な成長。赤い線は治療を要する目安。

数字で見るあつぎの教育

Q これって何の数字

26.9g

A 小学生1人1食当たりの給食の食べ残し量です。

(平成29年1学期)

この量はクリ1個ほどの重さです。クラスでの食育の充実や調理方法の工夫、おしゃべりをせずに食べる「もぐもぐタイム」を設けるなどの取り組みが実を結び、食べ残し量は減少傾向にあります。

最新の全国の年間食べ残し量と比べても厚木市(28年度実績)は少ない量ですが、給食は成長期の子どもに必要な栄養バランスを考えて作っているため、できるだけ残さずに食べることが理想です。



残してしまう理由で最も多いのが「好き嫌い」。特に野菜や魚介類を避けてしまいがちです。

食べ残しの問題は家庭でも同じですね。例えば、野菜の素揚げやカレー粉での味付け、魚に下味を付けるなど、ちょっとした工夫で食べやすくなります。苦手なものは少しでもいいので食べる機会を増やし、少しでも食べられたら、ほめてあげるのも効果的です。どんな食べ物も、生産してくれる人や調理してくれる人がいることを伝えるのも食育として大切なことですね。

戸田小PTAが文部科学大臣から表彰

★ Edu NEWS Navi ★

相川中の生徒が豪州の大学生と交流



曾根会長(中央右)らが曾田教育長(右)に喜びを報告

戸田小学校PTAが11月17日、文部科学大臣から「優良PTA」として表彰されました。戸田小PTAは、保護者と学校、地域が一体となり学びの場をつくる「コミュニティスクール」に取り組む学校のサポートや、防犯対策の強化に向け、地域の危険箇所を洗い出す住民アンケートなどの取り組みが評価され、受賞に輝きました。

相川中学校の生徒たちが11月29日、湘北短期大学に短期留学中のニューカッスル大の学生8人と英語や音楽、美術の授業などで交流しました。英語を使ったゲームや琴の演奏などを留学生と楽しみ、給食の時間には「好きな食べ物は何か」「日本のどこに行ったことがありますか」などと、英語で話し掛ける姿が見られました。



相川中を訪れた留学生と給食を食べながら交流